

第五期 哲学カフェ

4回 八月二四日 二時から

雑貨とカフェ ムーレック

学校唱歌とわたしたち

なつかしさとあやうさと

ゲスト 中西光雄さん

私たちにとって学校唱歌とは何なのでしょう。老人介護施設で暮らす認知症のお年寄りが「故郷」や「春の小川」は大きな声で歌いだすといひます。小学生の記憶が歌とともに甦る。それはなつかしく胸が熱くなる瞬間です。しかし、同時に唱歌は、富国強兵の旗印のもと国民国家の建設を目論んだ時の政府の意向を、端的にこどもたちに伝える道具でもありました。「蛍の光」には千島や沖縄が歌われ、「我は海の子」の少年は最後には軍艦に乗るのです。なつかしくてあやうくもある唱歌の歴史的な意味を、こ一緒に歌いながらひもといひてゆきたいと思ひます。

【前川喜平さん・京都新聞掲載書評から】

本書は、明治以来学校で教えられてきた唱歌の中に、国民国家の形成や帝国主義的拡張への国民の動員と

いった国家の意図が秘められていたことを解き明かしてくる。唱歌は国家意思に国民を絡め取っていく役割を持っていたのだ。それは、実は戦後に持ち越され、現代にもつながっている。例えば「兎（うさぎ）追いし」と始まる「故郷（ふるさと）」は「ふるさと」についての国民共通の「心性を形づくっていった」が、その「愛郷心が愛国心に再編成されて」いったのだという。改正された教育基本法の第二条第五号は、「教育の目標」として「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する…態度を養うこと」を掲げた。そこには、愛郷心と愛国心を一体視する観念の復活をみることが出来る。

(略)

文科省は、唱歌教育強化の理由を、「我が国で親しまれてきた唱歌」を「子どもからお年寄りまで世代を超えて共有できるようにすること」と説明している。世代を超えた「なつかしさ」の共有ということだ。しかしそこには、唱歌を紐帯（ちゆうたい）とする国民精神の統合という政治的意思の「あやうさ」が潜んでいることを忘れてはいけない。



第三回 まとめ 人はどうして

言葉を話すように

なったのだから？



【発題者 大江 矩夫さん】から
当日は台風6号の紀伊半島上陸で、開催できるか気をもみましたが、雨天にもかかわらず来店いただきありがとうございました。話題提供者として楽しく話をし、議論させていただきました。

「人はどうして言葉を話すようになったのだから？」という問に対して、どのような話題を提供できたのか、昨年末からいろいろと考え文献をあさってきました。ところがどんどん考えが発展して、報告では当初と範囲が広がり、「言語起源論」だけでなく「進化論」まで説明することになってしまいました。そのため反って難しいものになってしまいました。

補足になりますが、資料のQ&Aに書き漏らしたことで、言語の起源を説明するのを困難にしている理由として次の3点を考えています。一つは、『聖書』にかかれてるように、キリスト教の創造説では、神が人間を含む万物を創造し神の本質が言語であるとされており、この見解を克服するのが困難であったこと。

二つには、チヨムスキーの発見した普遍文法の法則は生得的なものとして謎が残され、文法の起源を解明できなかったこと。また欲求や感情・行動という生存活動の動因、さらに意思伝達の機能を言語論の考察が

ら排除したこと（行動主義批判）。

さらに三つ目として、ダーウィン進化論の自然選択説が、遺伝的変異の偶然性を強調したため、進化における生命の生存目的が吟味されることを遠ざけ、認識と行動の主体的意味（好奇心等の欲求実現）を究明することができなかつたことに理由があります。

とくに二つ目の理由としてチヨムスキーが、行動主義を言語論から排除したことが、言語論の全体像を見失わせたことの弊害が大きく、言語の論理性だけが強調されてしまいました。そのため、論理性が行動や好奇心に由来することが隠蔽され、言語の起源だけでなく言語の本質が見失われてしまいました。

三つ目、突然変異（偶然性）の進化的意味が重視された結果、不安定な自然環境における個体の維持と種の持続的生存という生命存在の主体的意味や目的が軽視され、生命と人間存在が偶然性と競争の支配下におかれることになり、生命道德の崩壊を促進することになりました。

さて、このような話は、進化論や普遍文法についての基本的理解が必要で専門的すぎると思われませんが、言語の謎解きをしようとする限り残念ながら避けて通れません。哲学カフェの話題提供としてふさわしかったが、現在では反省しています。でもこのような機会があつて初めてまとめることができたので、報告できたことに感謝しています。ありがとうございました。

【参加者のみなさんから】

● フレームが大きいので、わたしには焦点が定められず、ボンヤリとこれ知ってる、これ見たことあると、霧のかかった知識の森で幻の果物を探すよ

でもありません。迷子のまま【人はどうして言葉を話さなくなったのだらう？】と考えたほうが、リアルなのでは？と妄想し、抜け道に近くの道標としてのSNSやAI、もつともつと遭難寸前まで彷徨つての、失語からの再生としての石原吉郎やパウル・ツエランの肉声。……うろつろつる彷徨つたまま、次回も楽しみにしています。

いつから人は話すことが出来るようになったのかと時々考えていたところこの集まりを知って参加しました。皆様の話も面白かったです（ムツカシイ！）。感情が先に心の中に起こってから言葉があとからゆっくり出てきたのか…と考えています。「言葉」からとても広がった話しは面白い。今日デザートを食べた時に美味しい！と思つた時、あそつだ美味しと思つた時の前に何を感じたのか？と思つて思い直してみると、心にはわつとあつたかいはなやかな気持ちがありました。その後ことばとして美味しいでした。この感情を誰かに伝えたいと思ひました。もう少しつき詰めて「言葉」を考えながら生活してみたいと思ひました。ありがとうございました。

今回の話題提供は、どちらかというと言語の起源論的なお話だったので、言語とイメージ、動物と人間のちがいというような話が多かつたように思います。

参加者から、人類の起源論のところ、脳の容量が爆発的に大きくなって、だいぶんたつてから、言語を獲得したという説の紹介があり、



言語以外の手段を使ってコミュニケーションしていた期間が長かつたということや、人間の脳の容量は、せいぜい一五〇人くらいの人間とのコミュニケーションに適しているのが、現在のグローバルなコミュニケーションには、適応できないのでは？というお話などは、とても興味深かつたです。言語を獲得する前の、人間のイメージの世界は、どのようなものだったのか？という問いも、共通する視点で面白いと思ひました。人間が言葉を手に入れたことのプラスとマイナス、人類は、生き延びれるのかという問いも、切実に感じられるような、現代社会の状況だと思ひます。私自身は、最近、根本的に比喩的な性格をもつ言語とある種、形式化された「数」という、人間の二つの記号のタイプの違いが、現代の文明のさまざまな問題に影響していると感じています。更に、この問題を考えてみたいと思ひます。人類は言葉を発する前に判断力・理解力・想像力・創造力などがある程度発達していたと思つ。動物よりは発達段階が当然上であると思つ。目には見えないが動物は霊を持ち、人は靈魂を持っていると私は信じています。優良な宇宙人においては、各星によって自分たちの言語を使つていたり、星によっては言葉を発しないといわゆるテレパシーで想念をお互いに交わしているよつです。言葉についていつもぐずぐず考えているので、何かヒントを頂ければと思つて参加させていただきました。皆さん色々悩んでおられるのがある意味ほつとしました。内容はたいへん専門的で難解でしたが、初心者であたたく迎えて頂き感謝しております。